

木村史学における文化史論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学史料委員会 公開日: 2013-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 秀幸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14058

木村史学における文化史論

鈴木 秀 幸

一 はじめに

1 戦後の歴史学と文化史研究

表題に「木村史学」・「文化史」という語句を付してみたものの、考察は容易なことではないことが分った。「木村史学」とはどのような内容なのか。「文化」および「文化史」の定義とか、分野は何なのか。最初から難問に突き当たってしまったのである。とはいえ、この用語に変わる適当なものはないので、とりあえずごく簡単に「木村史学」とは木村礎（以下、「木村」）の築いた歴史理論、「文化」・「文化史」は文学・思想・芸術・学問教育等の分野、およびその歴史としておく。そうしたのは冒頭から厳密に確定するよりも、実態を具体的に考証する中で、明確にしていくこ

との方がより良いと思つたからである。

端的に言えば戦後の歴史学の中で、文化史研究の開始は順調とはいひ難い。その大きな要因は戦前における文化史研究にある。すなわち国家・政府による文化統制、国粹主義・軍国主義による文化活動のためである。むろん、それに反対する活動もあつたが、弾圧により制せられていたことは疑いない。そして敗戦後、それまでの日本文化が戦争翼賛的観点から強く否定されることとなつた。こうした風潮や政策は、歴史学における文化史研究の地位を著しく低下させるとともに、さらに欧米移入文化に圧倒され、傍流・亜流的存在に追いやられた。

やがて文化史の研究に動きが認められるようになるが、それは一躍、歴史学界の主流となつたマルクス主義史学・唯物史観による「国民的歴史学」、さらに社会構成史に依拠する論法であつた。そしてこうした文化史研究の方法はやがて民衆思想史のような、いふなれば民衆文化史論として展開していった。例えば百姓一揆思想論や民衆教育史論等々はその典型である。以上のような戦後文化史研究の追隨的傾向や傍流・亜流的存在がしばらく続いた。

一方、文化史研究には戦前・戦後を問わず芸術至上主義というべき純粹培養論が生きており、その中には至当と認められたり、一理があるとされたものもあるが、学界に影響を与えたものは多くはなかつた。⁽¹⁾

とはいえ、無論これらの研究が必ずしも全て悪いとか間違ひというわけではない。良好と判然できれば有効に活用すればよいのである。

2 木村の文化史意識

俗っぽい事例ではあるが、ある会話を紹介する。一九七一（昭和四六）年五月、千葉県の旧家に合宿調査の事前打ち合せのため木村に同行したことがある。

大檀那「ところで、木村先生はどちらのお生まれですか」

木村「江戸川区の小松川ですが、今は葛飾に住んでいます。東京の下町です」

大檀那「へえ、あそこに学者が育つ風土があるんですか」

その日の帰りの国鉄総武本線列車内におけることば。

木村「君、あの通りかもしれないな。今、下町に四年制の大学は無いんだよ。まあ、商船大はあるけど、あれは

また特別だ」

木村の生涯については、自らがしたためた『木村礎年譜』⁽²⁾、『戦前・戦後を歩く』⁽³⁾がある。また姪・木村千恵子による『ある家族の近代』⁽⁴⁾も十分に参考になる。一般に自伝とか、その類は客観性や公正さが欠如するものが多い。しかしこれらの書にはその欠点が少ない。そのため資料としても極めて有効である。それらによれば、木村は小松川（現東京都江戸川区）に、一九二四（大正一三年一月一五日）に生まれた（戸籍上では二六日）。当時、学者に多かつた富豪・エリート階級といった類の家に生まれたのではなく、父は茨城出身でガス会社の集金係、母は女工として勤めたことのある主婦業であった。その後、この近隣に多くあつた長屋を何箇所か転居した。上の兄二人に比べ、「悪童」ぶりがはじまつたのは小学校三年時からであつた。成績も良くはなかつたが、それでも少しずつ上昇した。逆に操行の方は悪くなり、五年生の時にはせつかく級長選挙で選ばれながらも、担任よりやり直すとされ、再選挙では木村は候補者からはずされた。ただし、この年、千人を越す生徒の中から五名が「進歩賞」を受け、代表して受けた（六年時には「佳良賞」を受ける）。六年生になつても「悪がき」ぶりは改まらなかつた。遊びはペーゴマ、ケンダマ等々で、達人であつた。三人兄弟では一番出来が悪かつたが、父のおかげで進学が出来、安田商業学校に入学した。在学中、最も熱中したのは勉強ではなく読書であつたが、教練では態度が良くないとして体罰を受けたり、二六〇〇年記念式典の作

文のことは内容が悪いというだけでなく、普段の行状についても叱責された（ただし左翼系の少年というわけではない）。こうした類のことは、実に具体的に上記著書で語っているが、筆者もしばしば聞いたことがある。別に誇張するわけでもなく、自己を分析するように淡々と話していた。いつてみれば木村の少年時代は本人が筆者に語った通り、「下町のあんちゃん」だったのである。

筆者は、ここで木村の生い立ちにおける「ガキ」ぶりを綴ることが目的ではない。要は木村の成育・修学上の環境や状況の中から、文化（狭義）的な部分を見出し出したかったのである。また、こうした成育環境は、のちの木村の文化史研究にどのような影響を与えるのか、ということも見出し出したかったのである。しかし、総じていえばそのような要素は少ない。

ただし、皆無とはいいたい。父の林平は趣味として琵琶をよくして弟子をとることもあったり、また肖像画を描いて売ることもあった。これらは生計のための内職であったが、木村を含め、子供は誰も受け継いでいない。筆者もごく稀に木村の歌（得意は「汽笛ボンボンの歌」、あとは「津軽海峡冬景色」くらい）を聞くことがあつても、上手いと思つたことは一度もなかった。絵やスケッチにいたつては見たこともない。

すでに述べた二度の成績受賞と読書のことはどうか。確かに小学校五・六年時は良かったようであるが、その後上昇していったわけではなく、商業学校では珠算の級もとれず、成績も良くなかつた。⁽⁵⁾ 読書は「好き」という域であり、作品を投稿したり、同人や師を求めることもなかつた。こうしたことからすれば、本好きの少年といつたくらいであろう。いずれにしても「文化」的・「知」的な雰囲気は漂わせる少年ではなかつた。しかし、木村の少年時代からは、他に屈せず、自己主張をしていく性格、あるいはさまざまな環境・状況の中でも生きぬく活力を感じることができ

商業学校卒業後、木村は薬品会社の事務員、国民学校の助教員、裁縫学校や女学校の事務員や教員を転々とするが、やがて軍隊に召集される(最下級兵)。その間、職務の傍ら明治大学二部(夜間)で歴史を学ぶ(途中、召集)⁷⁾。復員後、明治大学は卒業扱いとなっていた。女学校に復職したが、解雇され、奨学金を支給する東京文理科大学国史学科に入学、アルバイトにあけくれつつも卒業し、新制明治大学文学部助手となる。

3 その研究の流れ

木村の歴史研究者としての業績は、コラム・座談録・小論まで含めるとその数は膨大であるが、書籍類を検討することが最も至当である。その内、代表作ということになると、やはり自身が、そのつど組織した共同研究による刊行書であろう。前出『戦前・戦後を歩く』の中では、一覧表「共同研究と合宿調査との関係」として整理している。そこには『封建村落 その成立から解体へ——神奈川県津久井郡——』⁽⁸⁾から『村落生活の史的研究』⁽⁹⁾まで一〇点が掲載されている。

木村は、各共同研究の途中で、自らのテーマや内容を研究会・学会において報告したり、さらに論文として発表したり、あるいは書冊(単著・共著)の中で触れるなどしている。そうして一気に共同研究書に集約するのである。発表↓論文作成↓刊行書という方式である。

以上のことをもとに、単著も一冊含め、木村の研究の流れをごく大雑把に区切ってみると、次のようになる。

封建村落・新田村落・藩政史(一九五八年刊行)『封建村落 その成立から解体へ——』

神奈川県津久井郡——』一九六〇年刊行『新田村落——武蔵野とその周辺——』、一九六三年刊行『譜代藩政の展開と明治維新——下総佐倉藩——』

(村落の構造と幕藩体制および封建社会の領主による政策)

←

耕地と集落の歴史（一九六九年刊行『耕地と集落の歴史——香取社領村落の中世と近世一〇』）

(中世から近世への村落の連続性)

←

日本村落史（一九七八年刊行『日本村落史』）

(日本における共同体)

←

大原幽学（一九八一年刊行『大原幽学とその周辺』）

(幕末維新时期における人物とその周辺)

←

村落景観（一九八八年刊行『村落景観の史的研究』）

(原始・古代以降の景観)

←

村落生活（一九九四年刊行『村落生活の史的研究』）

(原始・古代以降の村人の生活)

当然、上記編著・単書以外にも、例えば『下級武士論』や『少女たちの戦争』といったものもあるが、すでに断つたように割愛した。

木村史学における文化史論

二 封建村落・新田村落等研究時について

1 社会構成史の風潮と意気込み

木村の最初の論文は一九五一（昭和二六）年の『駿台史学』第一号に発表した「幕末明治期における一富農の研究」である。そして合宿調査（共同研究）を開始したのは翌年のことであり、場所は神奈川県与瀬町（現相模原市緑区）である。前記したように、この研究は一九五八（昭和三三）年に『封建村落』としてまとめられた。また一九五四（同二九）年からは東京の西部の小平・砂川・村山町を中心とした新田村落の合宿調査および研究を開始し、やがて、前記『新田村落——武蔵野とその周辺』として刊行された。さらに一九五八（同三三）年からは同様に千葉県佐倉市を中心に藩政史研究を行ない、『譜代藩政の展開と明治維新——下総佐倉藩——』として完結した。同書は表題だけみれば、それまでの村落研究との流れで奇異に感じられるが、実は木村には萩藩の「閥閥録」や譜代内藤家文書を勤務先明治大学受け入れに関わったり、研究したという経緯がある。また同書の特色のひとつといえるのが藩政と領内農村との関わり、つまり農村からの藩政解明である。

木村は常に大きな研究は一〇年単位としていた。この初期にはそのような目安が明確にあったのか、否かは分らないが、結果としてはここまでで一〇年間を要している。もともと、若い頃から「雁行」的研究、つまりひとつの研究を終えて次にかかるということではなく、スライドさせつつ進めていった。

ところで、この時期の研究について後年、木村は次のように振り返っている。

当時（一九五〇年頃——筆者注）の私はこうした「理論的水準」を念頭に置きつつ村を歩き、村の文書を見ていた

わけである。⁽¹⁰⁾

この「理論的水準」については、次のように話している。

戦後歴史学というものは、思想的にはマルクス主義・唯物史観をバックにおいた発展理論です。それが歴史学研究として体系をとつたのが、社会構成史学です。社会構成の中に時代の特色を把握していく。政治、経済、文化、いろんなことを明らかにする。時間が経過して次の時代が来る。こういう考え方を社会構成史学という。⁽¹¹⁾

すなわち、木村は前章でも述べたところの社会構成史研究を念頭に置いていたのである。そのことについて、次のようにも具体的に紹介している。

この学風（社会構成史研究——筆者注）は各時代における社会構成の仕組みを説明するのに長じており、その内部に例えば律令体制論・封建社会論・近代社会移行論といった大テーマを生み出し、大テーマは次々と中テーマと、中テーマは多数を生み出した。⁽¹²⁾

このような意識でひたすら村歩きをしたのであるが、その目的は次のようである。

『封建村落』研究の頃——筆者注 私は言った。“一つの小さな村の中にも世界史の法則は貫徹している。”と⁽¹³⁾

2 その物足りなさ

ところが、こうした調査や研究に疑問をもつようになった。

こうした疑問（既成の概念や時代区分の枠に捉われていることに対して——筆者注）は自らのこれまでの研究態度についての根本的な疑問のだが、それらが未だ明確な形をとらないにせよ次から次へと湧いてくるようになったのは村歩きを始めて七・八年たった頃だったように思う。⁽¹⁴⁾

このことは木村の研究史にとつては一大事であった。「戦後歴史学」、とりわけ日本近世史研究、そして当時、大勢を占めていた社会構成史研究への大きな疑問であるとともに村を歩くことによつて得た「一大発見」でもあった。とはいえこうした研究を全く否定したわけではない。そのことを前出の『会報』第二十七号掲載の講演では、次のような言い方をしている。

この考え方（社会構成史研究——筆者注）は、現在でも、基本的には間違つてないと思います。だけれども社会構成だけでの歴史というのはつまらないです。

さらに論文「日本村落史私観」では、次のように述べている。

私は「戦後歴史学」の特徴の大きな一つを、基本法則史学・社会構成史学として定置したら、と考えている。⁽¹⁵⁾

村歩きの度合いがますます高まる木村にとつて、そうした意識が強まったのであろうか。ただし、「昭和史論争」等で指摘されていた人間不在、精神・思想の欠如について、その意識はあつたかどうか分らないが、当時の論文を一覧する限り、そうした類のことは見い出せない。⁽¹⁶⁾

三 日本村落史研究の開拓

1 香取社領研究の意義

戦後歴史学・日本近世史・社会構成史といった研究に対し、村歩きを通して受けた疑問について、最初に解明に挑んだのは村落の連続性の問題である。木村は明解に述べている。

近世村落は始めから所与の固定した存在であつたのではなく、歴史的な経過の中で存在したものである。（略）

近世村落の前身には、長期にわたる農民の労働と偽政者の支配の歴史があつたことは疑えない。⁽¹⁷⁾

そのための調査フィールドとして選定したのは、千葉県香取郡の佐原地域である。

私が選んだのは香取神宮の旧社領村落だつた。そこにおいて、村々の中世と近世とを連続して捉えようとしたのである。⁽¹⁸⁾

木村は語っていないが、香取社領一帯は、それまでの主たるフィールドの佐倉にきわめて近いことにより、ある程度の土地勘があること、さらに香取文書（『千葉縣史料』等所収）の存在を意識したことによる選定であらう。

ところが、実際に当たってみると、容易ではなく、著作の『耕地と集落の歴史』については「全体としては失敗作という他ない⁽¹⁹⁾」と自省している。同研究では時代差のある文献資料の解釈に苦慮している。例えば中世文書と近世文書の性質の相違だけではなく、資料の残存状況等といった問題である。したがって別の手法を援用すべく、勤務先の考古学研究室には住居址の発掘を、民俗学の専門家には神社・神宮・神事の調査を依頼している。さらに航空機による村落景観の空撮や集落移動の実測をもしている。こうしたあらゆる手法を駆使したことは、のちの木村の研究に大きく生かされる（後述）。もちろん、こうした過程では多くの先行的な研究に当つたことはいうまでもないが、とりわけ古島敏雄『土地に刻まれた歴史⁽²⁰⁾』には大いに啓発された。それゆえ後年、木村は割り切れない気持でありつつも、「私はこの一〇年の研究で実に多くのものを学んだ⁽²¹⁾」と述べている。

ここで、ひとつ注目できることは、木村の民俗学や宗教史への関心である。前掲『耕地と集落の歴史』において「理解に苦しんだのは香取神宮そのものであった」と吐露している。したがって同書中の「中世香取社の神宮と神事」は附論として、依頼された調査者により執筆されている。そして「十四世紀末に出現する祭頭制による神官再編成により、香取社の中世的体制が完成された⁽²²⁾」とする論文内容は香取社のことを知ることとなつた。とはいえ、まだこの

段階では「戦後歴史学」を乗り越える方法は明確には示していない。また文化史への直接的な関わりは薄い。

2 共同体研究

香取社領の研究は木村に村落史の研究のむずかしさをまざまざと知らしめることとなったが、またそれだけに目標が明確化した。また研究上の苦難を乗り越えようとする気概も湧いた。そして「近世史研究者ではなく日本村落史研究者を自称するようになった」⁽²³⁾。一九七〇年九月にまとめた自らの論文「日本村落史のこころみ」(前出)について、次のように解説している。

これは過去の総体としての歴史は、その全体性において現代を規定しているということ、歴史の全体性を基層から捉えるためには村落史という観点が必要であること、景観研究を前提としない経営研究や村落共同体研究は放棄なものに陥りやすいこと等を書いたものである。

つまり、木村は「戦後歴史学」、とくにその主流の社会構成史からの決別を宣言したのである。決別するということは、かなりの覚悟を必要とした。その覚悟のほどを次のようにうたったえている。

これ(社会構成史的学風——筆者注)は、天下国家の学としての日本近代史学の一つの巨大なタイプだ(略)この学風が、伝統的な政治史研究のみならず、もろもろの部門史をもその内部に大した矛盾もなく取り込んできたということにあるだろう。(略)しかし、これだと、歴史を生きた無数のそして無名の一般民の日常性といった問題は歴史の位置を占めることができなくなる。(略)社会構成史的学風は、『民衆』の非日常的行動や精神活動を歴史の舞台に登場させることはできたが、彼等の日常性を歴史の枠組として定置させることはできなかった。(略)『上部構造』『下部構造』を援用して語れば、両者を一括して把握するのではなく、『下部構造』を歴史の枠組にしたいとい

うことである。⁽²⁴⁾

要は地域上層民の非日常的活動を中心としていては、歴史の全体は分らないということである。さらにいえば社会構成史研究の手法は「上から目線」で地域民の日常を収斂しているということである。しかし問題は、では自らはどういう方法で具体化するかということである。そのために木村が検討したのは、従来からあり、村落史研究にとつて欠くことのできない共同体研究である。

木村は一時しきりにマルクスの『資本主義的生産に先行する諸形態』を口にするようになった。共有と私有の対抗関係に基づく前近代社会⇨共同社会という位置付け、あるいはアジア的・古典古代的・ゲルマン的な区分等々である。それを援用した大塚久雄の『共同体の基礎理論』の共同体の発展方式⇨原始⇨アジア的⇨古典古代的⇨ゲルマン的に話が及ぶことも当然であった。またウェーバーについては、プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神を主とした『経済と社会』については、共同体社会は土地所有を基礎としているとあるため、欠くことはなかった。ただし、その理論の内、共同体の成立には宗教的共同体が先行し、それは資本主義成立時にあつても同様であること、そしてその規則は宗教的・道徳的の共同意識によるといった部分に触れたことは、筆者の記憶では全くない。

木村が共同体を最初に論文として発表したのは、「村落共同体の展開——歴史研究者からの素描」⁽²⁵⁾であるが、本格的なものには「日本の共同体」⁽²⁶⁾であり、その後のいくつかの共同体論をも一書にまとめたものが、前出『日本村落史』である。その骨子は、村落⇨耕地+集落+αであること、景観（勤労農民の生活の場）を基底に経営単位・共同体・権力（領主制）の考察すべきこと、村落景観の復元と観察をすべきことといったことである。そして、以上の視点をもとに原始以来の村落景観とその共同体を論ずることにより、共同体とそれに対応した政治権力の形態の公式化につとめた「アジア的」に疑問を持つたり（とくに停滞論について）、大塚共同体論（とくに段階論）の修正をした。この木村の

所有論的共同体論に対して強く批判したのは中村吉治である。中村は共同体Ⅱ家の連合体(村)、家・村Ⅱ生産・労働組織というように概念の規定をし、さらに時期区分については前近代Ⅱ身分社会Ⅱ共同体社会、つまり原始・古代は「氏族共同体」だが、中世には「名主共同体」となり、近世にはくずれて「擬制的共同体」となったとし、さらに近代Ⅱ資本主義社会Ⅱ階級社会Ⅱ空洞化共同体社会(解体)、とした。すなわち機能的共同体論である。

これに対し、木村は前近代Ⅱ階級社会、つまり身分社会ではないとし、それは近代に解体したと主張した。また村落共同体以前は、国家・領主に対して微弱な農民(小地域単位)およびその土地所有はやがて有機的に統一され、さらには解体へと進むという図式を創出した。

当時、共同体論はさまざまな観点から理論が提示されたのであるが、木村を批判したのは、中村だけではない。例えば色川大吉は「近代日本の共同体」⁽²⁷⁾の中で、いわゆる「ヨコ社会」の重視を説いた。また「躍動期の部落共同体」は近世来のものであり、豪農は「村落共同体」に所属しているものであるとした。さらにそれにより、木村の共同体論は「さみしい共同体論」と断定した。多摩地域をフィールドとして「底辺」に流れる民衆の思想論を説く色川ならではの共同体論であり、木村への強烈な批判である(後述)。

このころ、色川批判とともに木村が気に懸けていたのは、古川貞雄の「村の遊び日」論⁽²⁸⁾である。領主制のとどかぬところのそのことは、機能的色彩を有しているからである。しかし、柳田國男による思想的・精神論的共同体論(とくに信仰重視)と生活上の共同機能論については、民俗学の性質を検討した結果、一応留意すればよいといった程度にとどめている。また木村は民俗学だけではなく、考古学、社会学等、隣接諸科学について、逐一、精査したことはいうまでもない。その結果の紹介は別稿に譲る。

しかし、木村の共同体論に思想・文化は含まれているのか、どうか。はたして村落の構成要素とした「α」(前記)

とは何か。木村と視点はやや異なるが、同世代であり、交流のあつた尾籾正英は、日本歴史を古代と近代に区分する方法を主張した。一四世紀から一六世紀の社会変動により、「家」が一般的に形成されたこと、そして共同体の統合がなされた（下から積み上げられた幕藩国家とした。幕藩国家の政治組織（オトナ↓家老）の確立は学問の普及をうながしたとする。²⁹）

結論を急げば、木村の「α」は水利などのことであり、学問・思想・文化は含まれない。ゆえに共同体論の主著『日本村落史』には思想・文化については、ほとんど扱われていない。やはり、木村共同体論に思想・文化は瑣末的事柄であつたのか。なお、同書の刊行後、木村は自らの共同体論を「悲観的共同体論」と語つたこともあつた。

四 大原幽学の研究

1 研究の契機

これまでの木村の研究からすれば、次は当然のように村落の景観論となるはずである。しかし、そうはならなかつた。大原幽学を共同研究、つまり主たる研究対象とした。

そのわけを探る前に、大原幽学についてごく簡潔に述べておく。大原幽学は一七九七（寛政九）年に生まれ、「江戸時代後期に庶民教化に尽力した指導者」³⁰である。その出自は自らが語らなかつたため不明である。尾張藩家老大道寺家であるということが伝えられているが、諸説ある。一八歳の時、放浪の身となつたが、諸国修行の末、農村荒廢に苦しむ下総長部村遠藤良左衛門らの招きにより、同村に定住、さまざまな復興活動と多くの門人指導に尽力した。その傍ら学問も怠らず『性学趣意』・『微味幽玄考』等を著わし、「性学（性理学）」論を築いた。しかし教場というべき

「改心楼」への博徒乱入に始まる一件で幕府から処分を受け、ついに一八五八（安政五）年三月に自刃した。

木村は筆者に「君のやっているところ（千葉県香取郡干潟町・現旭市）は面白そうだね」と語ったことがある。そして、前掲『大原幽学とその周辺』³¹に次のようにも綴っている。

一九七〇年当時大学院生だった鈴木秀幸氏は、学部時代から大原幽学の故地を含む千葉県香取郡干潟町地域の文書調査をしており、私はその話をきいていたし、興味も持っていた。

筆者は一九六七（昭和四二）年八月から同地の教育史の調査や研究に当たっていた。ちょうどその頃は学部学生を誘って同地を駆け回り、しかも多くの人達とはかなり親しくなっていた。筆者の案内により木村が他の院生・教員らと干潟に巡見に見えたのは、一九七〇（昭和四五）年四月のことである。そして、翌年八月より一〇年間の共同研究が開始され、筆者はチーフ・マネージャーとなった。しかし、木村はなぜ、教育史・思想史・文化史、かつ人物史に取組もうとしたのであろうか。あの「日本村落史」（とくに景観研究）はどうしたのか。

木村が大原幽学を知ったのは、一九六三（同三八）年四月刊行の中井信彦『大原幽学』³²が刊行された時であり、その時に書評を書いている。³³そのことについて久しぶりに想い起したことと思われる。

実は木村は、一九六七年以来、静岡県掛川市を中心とした報徳関係の共同研究に加わっていた。同研究では、のちの一九七六（同五二）年七月に、中村雄二郎とともに編者になり『村落・報徳・地主制——日本近代の基底——』と題して上梓している。ところが前掲『戦前・戦後を歩く』の中で「尊徳の『成功』は、私には魅力がなかった」というのである。事実、編者にもかかわらず、倉真村における本在家と柄在家の主従関係を考察した「明治期村落の前提——江戸時代の倉真村」という論文を書いて終っている。

それにしても、なぜ大原幽学なのか。それは深刻なわけがあった。以下、やや長いが、『戦前・戦後を歩く』から

引用する。

若い時には私を捉えていた社会構成史風の戦後歴史学から何とかして決別したいと考えて、いろいろ思案し、その結果香取社領村落の研究をやってみたものの、それでスッキリしたわけでもなく、私は依然として混迷していたし、憂鬱でもあった。

大学紛争に直面しているのもまた憂鬱なものである。私はこの時期、出口がわからない一種の閉塞感の中にあつたように思う。(略) 私は彼ら(紛争参加学生——筆者注)の中に、人間と社会との関係を模索している姿を見たようである。彼らはそれなりの人生観を集団で展開しているのだと思つたことが何回もある。

私の心の中には、そうした状況に直面して憂鬱と研究上の依然たる行き詰まり感からくる憂鬱とがダブつていた。このような場合、私の突破口は研究しかない。その突破口は大原幽学(二七九七—一八五八年)に求めたからである。

当時、すなわち一九七一(同四六)年時の木村は四七歳と油が乗り切つている年令であり、学内では一部教務部長に就任したり、大学評議員にも選任された。また学外では学術会議員でもあった。そして翌年も学園紛争の真只中にあり、機動隊導入の、いわゆる「中野学園事件」が発生、やがて長い裁判が始まる。体調が極度に悪化したのは一九七一(昭和四八)年のことであつた。それでも木村は次のようにも記している。

今にして思えば一九七〇年当時は、私の転回期だつた。転回の一つの方向性は「日本村落史」であつて(略)もうひとつがこの「大原幽学とその周辺」についての研究である。

率直にいつて、私は人間の内面を見つめる手掛りを歴史の中に求めたかつた。(略)私は恐らく幽学の失意と「失敗」にひかれたのであろう。³⁶⁾

大学紛争時に対して大学改革準備委員長、教務部長として、その渦中で奔走したのであるが、夏期合宿は一九七二年に一週間（それでも最終日には参加）休んだだけであった。しかし、心の中は苦渋に満ちていたことは疑う余地がない。

2 研究の視点・方法

学生・卒業生らの多くが参加する夏期調査は年一回、一週間であったが、テーマを持った主力メンバーや卒業論文を書く学生は個人、それ以外にも有志で調査に出向いた。共同調査は一〇年間、あと一年間は執筆・編集であった。当然、調査以外では毎週金曜日の夜、木村研究室で長年続けられてきた「金曜研究会」（金曜日夜開催、OB・OG参加）において幽学研究の執筆者は発表をした（それ以外の者は各自テーマを発表）。さらに筆者は別途に「干潟研究会」の開設を提案、同じように各人、発表を行なった。つまり「金曜研究会」でも「干潟研究会」でも研究発表が当たるわけである。研究発表をするたびに、「歩いて資料を探したり、読んだりするのは楽しいけど、それだけでは研究者ではない。論理化・客観化しなければならぬ」という木村のことに胸が締め付けられる思いだった。

そのことはさておき、木村には大原幽学研究に当っては、大きな危惧があった。そのことは次の文盲から知りうる。

(37) これまでの幽学研究の殆んどは専ら幽学個人に関する研究であって、幕末という時代との関連における把握は弱い。

そこで、次のようなテーマと視標を示した。

研究のテーマ（つまり、書名）は「大原幽学とその周辺」とする。本書『大原幽学とその周辺』における「周辺」とは、幽学と同時代における他の知的活動、いわば「横」における周辺、並びに幽学の門人や彼の没後の諸問題、

いわば「縦」における周辺の複合を意味している。右のような意味において、幽学を「周辺」との関係において見る(略)⁽³⁸⁾。

このことは、さらに簡潔に言えば、大原幽学の人生や時代の変化も追うが、その周りのことも同等に重視するということである。さらに言えば「大原幽学の周辺」ではなく、「とその周辺」である。筆者はこの研究では「とその周辺」の部分の担い、執筆に当っては多くの頁数をいただいたが、もし「の周辺」といった程度の扱いなら志気に影響があつただろう。この「と」は、最大の特徴である。文書の悉皆調査が終わつたあとは、関連調査と文書筆写が続けられた。目録に基づいて文書の検討が始まっていくにつれ、大原幽学に関して従来からの研究について、大きな問題が発見された。次のことである。

文書を読み進むにつれ、これまでの研究が、事実の確定において誤ちの多いこともわかつてきた。⁽³⁹⁾

長年、いくつもの村を歩き、多くの文書を見て、検討してきた木村ならではの文言である。さらに、次のようにも述べている。

また幽学没後の文書には、全く知らなかつたこと、全く思いがけないことも数々あつた。つまり実にスリリングな研究だつたのである。⁽⁴⁰⁾

本項をまとめていえば、『大原幽学とその周辺』の中で、木村が記している次のようなことになる。

研究内容についての方向性は(略)①幽学(本書第一編)のみならず、幽学と同時代のさまざまな状況についても調べる(本書第二編、第三編)、②幽学没後の状況をも追跡する(本書第四編)、ということであり(略)⁽⁴¹⁾

3 研究の結果

本研究が開始された時、木村は皆の前で「この研究は一〇年！一九八〇年で終わる」と宣言した。あまりにも先のことだと皆は笑った。しかし一九八〇年は確実にやってきた。その年、夏期合宿最後の日、木村は檄を飛ばし、さらに原稿締切日を指定した。その日、合宿所の中央公民館玄関で撮った記念写真には引きつったメンバー（執筆者）の顔が並んでいる。

木村は三年後、大原幽学研究について、次のように回想している。

これに費やした歳月は一〇年だが、その間きわめて面白かった。共同研究としては、成功した部類に入るものと思っている。(略) 多くの人々の奮闘努力は大したものであった。⁽⁴²⁾

実際、血気盛んなメンバーは、継続して調査・研究を望んだ。木村は次のように綴っている。

本ができると「干潟衆」(幽学とその周辺に関する研究グループの内称)は当然のことながら解散した。しかしながら、この一〇年間この研究の幹事をつとめた鈴木秀幸氏の肝煎でごく少数の人々が残り火を守った。これを「干潟残党」という(私もその一人)⁽⁴³⁾。

この研究は一九八一(昭和五六)年より一九八七(同六二)年まで行なわれ、『歴史論』第九号に「幽学・村落・文化」と題する特集を組んだ。木村は「文書紹介「出役・手先等悪事風聞書」を執筆した。そして干潟残党は今日でも地域で資料の調査・保存・研究に当たっている(後述)。

なお、木村は編者として『地方文化の日本史』第七巻⁽⁴⁴⁾を刊行したことがあるが、同書の「概説」では、最後に、次のように述べている。

本書において、真正面からとりあげた著名人は大原幽学ぐらいなものである。彼とても農民の日常性にきわめて密着した人だった。主題は何といつても無名人であり、彼等の生活の諸相なのである。

つまり地方文化を語ったとしても、著名人を扱うことは極力、したくないこと、そしてハイカルチャーに属する文人ではないこと、よく見られる偉人の成功談ではないこと、日常の生活を描くことであつた。この内、強く響く語は「無名人」、「日常性」である。大原幽学の場合もそのような研究姿勢であつた。

重要なことは、木村の共同体論は全くの所有論的共同体論だけではなく、生活や思想をも強く意識するようになったことである。つまり幽学共同研究によって村落の描写の際、そうしたことの重要性が自身によって強く認識されるようになったということが出来る。その意味では、木村にとつて幽学の研究は、「戦後歴史学」への決別以来の、大きな画期である。

五 村落生活史の研究

前記「干潟衆」の面々が、大原幽学研究の終結に向けて緊張していた頃、すなわち一九七八（昭和五三）年八月から、木村は茨城県西地域を調査対象地域として共同研究の合宿を開始した。次なるテーマは村落における景観と生活であつた。つまり、日本史村落史研究を景観と生活を研究の主軸としたのである。ただし、景観も生活も同じフィールドであり、調査は同時並行であつたが、研究の方は前者の方を数年先行させた。

ところで、木村はそれまでの「共同体」と「生活」という用語について、次のように述べている。

私は「日本の共同体」を書き終わってからは、歴史用語としての「共同体」の使用を停止し、それに代わって

「生活」を用いるようになった。また「村落共同体」もやめ「村社会」ということにした（「共同体」の意味内容は人によってバラバラでいっこうにとりつめがない。用いるには厳密な規定が必要である）。

実際には、「日本の共同体」のちも、「共同体」と題した一文を『世界歴史大辞典』⁽⁴⁶⁾に寄せているが、これは編集委員から与えられた項目であろう。確かに、一九八〇（昭和五五）年七月刊行の『近世の村』⁽⁴⁷⁾には使用されていない。

しかし、それにしても「共同体」をやめて、「生活」としたのはなぜか。すでに紹介したように木村の共同体論では「所有論的共同体論」（村落Ⅱ耕地＋集落＋ α 、 α は水利等）、つまり景観が重視されていたはずである。

ここで想起するのは木村理論に対する「さみしい共同体論」という批判である。そうした批判だけではなく、「所有論的共同体論」に対置される「機能論的共同体論」は中村吉治以外にも数多くあった。筆者はさきに古川貞雄や柳田國男について、ごく簡単に紹介したが、他にも桜井徳太郎の「結果の原点」論、後藤総一郎の「常民」論等、枚挙にいとまがない。そして、すでに指摘したように、香取社領の景観研究後の大原幽学研究では、生活の場としての景観だけではなく、そこで村人によって営まれる生活の重要性を確認したのである。こうした木村の変節について、牧原憲夫は「思想としての日本村落史」の中で、以下のように指摘されている。

理論面では、一旦は「超歴史的」だと否定された「機能論」の復権という形をとった。その契機は色川大吉「近代日本の共同体」（一九七四年）の衝撃だった。三里塚をはじめとする住民運動の高揚を背景して、地域共同体が反権力の砦となりうることを主張した色川氏の見解は、共同体を「個人の自立」を阻害する「前近代の問題」とみなしてきた木村氏の立論の根源を揺さぶった。⁽⁴⁸⁾

木村はこうした批判に対し、のちに前掲『村の世界 視座と方法』の「解説」において当時を振り返り、「『所有論的』純化にもとづいた」共同体でなければ一貫して書けなかつたと想起している。さらにその「解説」で、次のよう

にも記している。

その上（所有的共同体論——筆者注）に機能論的共同体論を一層学び、それを附加したい。もっともらしい言い方をすれば、両者を統一したい、というのが、現在の願望である。

現在というのは、正確にいつかはつきりしないが、同書の刊行は一九九六年五月であるので、それ以前ということになる。⁽⁴⁹⁾おそらく木村は自らの共同体論を大きく修正・変更したと思われる。つまり「共同体論↓村落史、耕地+集落+ α ↓景観、プラス生活史」といった按配である。

行論を元に戻す。景観研究の方は『村落景観の史的研究』と題して、一九八八（同六三）年一二月に刊行された。ここには文化史のテーマは登場しない。同書の刊行後は生活史研究に全力が注がれたことはいままでもない。そこにおける文化史の扱いはどうであったのか。

ところで木村はこの村落の生活史研究について、説明すべき点を四点ほど提示した。以下の通りである。⁽⁵⁰⁾

- (1) 小地域（坪——村——村々）
- (2) 地域内の社会関係を重視する。
- (3) 生産と消費の双方を重視する。
- (4) 精神生活を重視する。

ここで注目すべき点は四番目の「精神生活」である。「精神生活」とは何か。木村は以前、前出『江戸と地方文化』の中で、次のように綴っている。

人間生活には、精神的諸要素の占める地位もまた高いのであり、これを軽視しては生活史は成り立たない。

また一九八四年一月に駒澤大学における「私観『戦後歴史学』——日本村落史の周辺——」と題した講演で、次

のように語っている⁽⁵¹⁾。

人間には思想とか心情とかのために死ぬことができません。そのことは、特攻隊のみなさんを考えればわかると思っています。

いずれとも、大原幽学研究真只中の発言である。当時、金曜研究会等では「精神生活」に類する、先行研究の報告や討議がなされた。そして木村は、次のように断言した。

(1) 民俗学は歴史学が無視してきた村人相互の精神的なつながりを伝統的に重視してきた。

(2) そこ(民俗学——筆者注)に描かれる生活史像はあまりに牧歌的でありすぎました。⁽⁵²⁾

また、地域民の文化活動を対象とする社会学等も検討したことはいうまでもない。ところで、「精神生活」とは何か。その概念を次のように説明している。

「生活」に物的、経済的側面と精神的側面とがある。(略)ここにいう「精神的・意識的側面」とは気持ち、心の動き、態度等々の用語で表現されているごとく日常的な事象を意味しており、「思想史」「精神史」等として表現されてきた抽象力の強い高度な知的事象のことではない。⁽⁵³⁾

このことについて、さらに砕いて、次のようにも表現している。

精神生活とは、一般に学問とか芸術と言われる「高度」の文化現象を含むが、それ以外の例えば民俗的な年中行事や、酒を飲んでくだらなことを喋り合うといった状況を含むものである。⁽⁵⁴⁾

では、共同研究の成果『村落生活の史的研究』では、どのように扱われているのか。同書の中から、精神生活と思われる題目を抽出してみる。

第四編 近世の村落における小地域

七 村・坪における寮

- 1 小地域の公民館と寮との関係
- 2 寮の建物と寮の制度的性格——近世・近代を通じて——
- 3 寮の機能とその変容
- 4 寮の終焉

第五編 村の日常生活

二 田宿村と猫島村(2)——日常生活の諸相——

- 4 村社会における交流
 - 5 村人の精神生活
- 三 伊古立村
- 2 ある農家の三代
 - 4 村落生活と文化

むろん、他の章節にも精神生活に関わる事柄は含まれているが、主たる部分は上記の項目である(木村筆ではない)。景観と生活を二本立てとした一大共同研究終了後、木村はその調査地域のひとつ、茨城県千代川村(現下妻市)の依頼により、自治体史の事業に関わった。木村は監修者とはいえ、精力的に奮闘した。木村の下で委員長となった筆者は、この一〇年間は容易ならざる覚悟で臨んだ。「豊臣秀吉や徳川家康のことより村の人達のことを書いてほしい」という永瀬純一村長(故人、長塚節研究者)と日本村落史の成果をひっさげた木村の思いが一致したこの編纂一〇年間のことは別稿に執筆する予定であるので、ここでは『村史 千代川村生活史』(第二巻地誌)⁵⁵の内、二ヶ村(大字)

の精神生活関係の目次を列記する。

第一編 台地の村

第一章 村岡

第四節 村の運営

1 坪

2 公共施設と共有財産

3 共同祈願と講

第五節 信仰

1 香取神社

2 浅間神社

3 稻荷神社

4 満徳寺

5 小祠と石仏

第三編 低地の村々

第六章 鯨

第五節 精神生活の指標と場

1 神々の盛衰

2 寺・堂(行屋)・墓地

3 石造物の語る信仰

4 祭礼と娯楽

5 村の文化人

6 事件と災害

木村は千代川村史編纂の終盤に、前掲『村のこころ——史料が語る村びとの精神生活』を刊行した。そこで序章を除いて、章節（目次）を紹介する。

第一章 村の意識

1 村をまもる——里正左衛門の慶応二年

2 座る場所をきめる

3 祭りと喧嘩

4 『土』の女性たち

5 花火をあげる人々

第二章 村人の学び

1 大原幽学のもとに集う人々

2 幽学没後の性学——変質、分裂、そして再建

3 『柴崎往来』の世界

4 『学校沿革誌』が語る日本の近代

5 国民学校の時代

第三章 書くといういとなみ

1 家訓——家永統の願い

2 さまざまな遺書

3 年代記の世界

4 ふつうの人々の日記が語る昭和の戦争

精神生活の歴史を体系化し、具体的に証明した、この段階における木村の最善の結果であろう。しかし、木村自身はこの「精神生活」論について、前掲『村落生活の史的研究』では次のように述べている。

精神生活像このような（一般村民の喜怒哀楽を中心とする日常的な精神的営み）を、地域に即しつつ包括的に描くためには、それに迫るための新しい手法が必要なのだが、それをわれわれはまだ持っていない。

そのため、前掲『村のこころ』は、「今後における精神生活史の豊かな稔りへの最初のステップとして書いたものである」としている。

なお、木村は同書で、こうした「精神・思想・意識・気持ち等々の用語で説明される『人間の内面』における目には見えないが重要なものの存在に歴史研究者として開眼した」のは、大原幽学の共同研究であるとしている。

六 学ぶべきこと、検討すべきこと——まとめに代えて——

1 スライド的發展思想

以上の経緯からでも十分に読みとれるように、木村の研究は、「奇をてらう」方法はとらない。期限を区切り、地

道に事に当るが、目標の目安がたつと、次のテーマの頭出しをするといったことを続けた。雁行的研究である。

社会構成史による研究↓戦後歴史学への疑問↓香取社領研究↓共同体の研究↓大原幽学研究↓景観研究↓生活史研究↓精神生活研究

日本村落史という分野を確立するため、これらの研究をスライドさせつつ、進展させてきたのである。ある時の合宿中、木村は筆者に、「ひとつの大きな研究を終わってから、次をやるのはだめなのだ。ひとつ終わるとヤレヤレとなつて、次へのスタートが鈍くなるんだ」と語った。

また、予定で真黒になるほど書き込まれた手帳（出版社から毎年贈呈されるもの）に新たな記入をしていた時、「大体、暇な人間ほど、『忙しい、忙しい』という」。どうも、原稿提出の件で電話の相手が「忙しい」を連発した時らしい。ある時には「本当に忙しい人間は、ひとつ遅れると先々まで影響が出る」とも述べたこともある。したがって、筆者の記憶では、木村は原稿提出や待ち合わせ等々で遅れたことはなかった。常に自ら目標を持ち、律し続けたといえる。こうした努力・使命感・情熱もあり、社会構成史から精神生活史までの幅広い歴史論を的確に構築しえたのであろう。

2 大局的と具体的な見地

木村が日本村落史研究の確立のためにスライド的思考によって邁進したことは前項で述べた。しかしそれだけでは説明不十分である。それは大局的見地と具体的なその両面を使い分けることができたからである。

筆者の座右銘は「頭と足を使う」であるが、これは木村から諭されたことばであり、頭⇨考える⇨考察、足⇨歩く⇨実践である（筆者は後者の比率大）。大局的見地からと具体的な行動はその「頭と足を使う」ということと符合すると

いつてもよい。であるから「戦後歴史学」への疑問、「日本村落史」の構想、そして「精神生活」への挑戦等の論理と、「村歩き」とは両輪ともいうべきものである。

大原幽学研究の際、木村は幽学の教化活動のひとつとして、女性の活動を指摘し、二宮尊徳の仕法との違い、つまりそれは「家」の重視に基因していることを主張した。そのきつかけは、文書目録の中から女性門人帳の存在に注目したことから始まった。以後は、ひたすら女性門人の子孫宅を訪ねた。幽学門人鈴木はつの一代記は長い巻物であるが、保存状態は良好ではなかった。木村は当主より借り受け、自費でその文書の修復を専門家に依頼し、それから解読にかかった。幾度か、その所蔵者宅に通ったり（バス停留所より徒歩三〇分以上）、その周辺の巡見をした。

「原稿を書かなくちゃいけないけど、何か、いい資料ないかな」とか、「資料をもってきたら、原稿書きますよ」と豪語する研究者に出会うことが少なくなかった筆者は、こうした木村の学問姿勢に勇気を得た。「考えれば考えるほど締った文章になる、汗をかけばかくほど良い結果になる」という木村のことばはわれわれへの訓戒のみならず、自らの信条でもあったと思う。

3 事実の確定と保存

木村は、思想史や文化史、とりわけ教育史を批判したことがある。それは、その存在を否定したわけではない。その研究に対してである。大原幽学研究時、民衆思想史や民衆教育史の研究は盛んになされた。しかし、今日からすれば、こうした研究の多くはイデオロギーやシエーマが「まずありき」であった。つまり、自分の考えに、あとから都合の良い資料を当てはめていくという按配である。また自ら軍国教育の象徴である国民学校の教員経験をもつ木村は教育・教育史ひいては思想史等々の研究が体制に追随しやすかったり、外国（ドイツなど）の移入に乗りやすい性質

や傾向を有することを憂慮していた。そうした経緯（とくに戦時下）が自省を促すとともに繰り返しを避けたいという強い気持ちもあったと思われる。歴史学については、次のように講演している。

歴史学から実証性と事実の保存というものを除いたらまっとうな学問ではなくなりますが、歴史学には事実の保存というものが重要です。歴史の解釈というものは変わるものです。しかしながら、解釈を行うにあたって事実と実証は必要ですし、解釈にも節度を保つ必要があるかと思えます。⁽⁵⁶⁾

木村は歴史に関して研究や教育以外にも、社会的にさまざまな活動をした。その中でも資料の保存運動には並々ならぬ心血を注いだ。特筆すべしは、公文書館法の制定への尽力である。このことは、本行論の主旨ではないが、若き学徒会議会員として、陰に陽に大奔走をしている。それもやはり木村が常に口にする「実証」と「事実の保存」のためであった。

一九七二（昭和四二）年の大原幽学の合宿調査は八月七日～一三日までであった。この日程のほとんどは雨であった。それも大雨で、一日、所蔵者宅での悉皆調査を取り止め、地域や資料に関する講義に変更したこともあった。合宿を打ち上げて数日後、筆者は新聞夕刊を見て、愕然とした。それは、その後、同地を襲った台風が、われわれの調査（旧干潟町一帯）で猛威をふるい、甚大な被害を与えた。われわれの調査に大変協力してくれた幽学門人の子孫宅（新築してまもない）は、裏山の土砂が崩れ、当主は重傷を負った。しかし入院中、夫人に、土砂に埋もれた資料を探させた。それはあの暑い中、若い人達が必死に整理した資料を無くしては申し訳ないとのことであった。なお、筆者は即座に木村に電話すると「今は混乱しているだろうから、もう少したって町や町の人達のお見舞に行こう」ということになり、後日に現地へ向った。帰京した木村は、ある雑誌に一筆執り、「古文書保存のために微力を尽している私はA氏によって無限の励ましを受けた」と結んでいる。⁽⁵⁷⁾

4 顕彰と客観・公正

他の分野でも同様のことがいえるかもしれないが、とりわけ文化史は人物を描くことが多い。その人物描写の上での大きな問題はと、問えば、少なくとも歴史研究者は顕彰についてと答える者が多い。

数多くの木村の論文の中で、特定の人物を対象としたものはきわめて少ないが、すでに紹介した大原幽学は最も力を入れたものである。この共同研究のテーマと刊行書についてはすでに述べた。『大原幽学とその周辺』であり、「とその周辺」が大きな特色である。したがって、かなり意識して幽学時代の文化人・教育者の活動も重視した。また幽学出生時の近世後期から門人の時代（明治期）の時間的な推移や背景も考慮した。この研究において、ぜひとも執筆をしたいが、軽々には扱えない大きな問題があった。それは幽学没後、三代目教主の時に発生した。すなわち、幽学の教えをめぐる相違、そのことと関連した感情的な対立である。最も深刻であったのは、実は門人の家族内で二派に分れて激烈な家庭騒動まで起ったことである。この一件はその門人宅にまとまった形で資料として残されており、従来の研究においては一度も取り上げられたことはなかった。しかもこの事件を解明することは、幽学研究にとつては重要な意味をもつものであった。

結局、その一件は木村により『大原幽学とその周辺』に実名入りで執筆された。とすると、簡単に聞こえるが、実際には親族が会した話し合いの前日から木村は明らかに緊張していた。そして全員了承を得るまで時間を要した。文章としては、かなりリアルに踏み込んで書かれているが、推測や私情はほとんど見うけられない。

木村は明治大学在職中、大学史（明治大学百年史）には編纂委員長として関わっている。その編纂に当って、次のような方針を明示した。長文になるので、ひとつひとつの解説文は省略して列記する。

- 一 近代日本社会との結びつきを重視し、それによって明治大学を社会的広がりの中に位置づけること。
 - 一 近代日本社会の知的諸潮流、諸問題との関係を重視し、それに最も敏感な学生の動向に留意すること。
 - 一 一般的な教育事項についての史料収載や記述を努めて限定すること。
 - 一 明治大学の歴史を大学史一般の中に埋没させることなく、明治大学の独自性を重視すること。
 - 一 『明治大学百年史』を顕彰や論断の場にしないこと。⁽³⁸⁾
- このことについて、のちに木村は筆者に「あれは五箇条の御誓文みたいなもんだ⁽³⁹⁾」といつて、その理由を説いた。教育史研究や編集にとっては、そのひとつひとつが実に重い文言であるが、「顕彰」云々の五点目はとくに強く印象に残った。

木村は、二〇〇一年一〇月の全国大学史資料協議会全国大会（於神奈川大学）において「大学史および大学史料を考える」と題し、記念講演を行なった。その内容は高評であり、多くの会員の強い要望で同協議会東日本部会々報『大学アーカイヴズ』NO. 29に「講演記録」として掲載された。その内容を全て取り上げる余裕はないが、上記の五条を例に挙げて平易に解説をしている部分がある。当然、「顕彰もしない。論断もしない、事実を書く。（略）そんな事やりだせば收拾がつかなくなる」と力説している。

さらに、この講演では、一条追加をした。それは「まずいことでも書く」ということである。以下、一部分を引用する。

その大学、その機関にとって不利益と思われる事でも、書くということです。（略）大学にとってこれは不名誉じゃないかと思われる事でも、事柄の性質上影響力の大きいと思われる事は出す。（略）ただし、「追求主義といわれるような、ばかばかしい主義に陥らないような程度にしなきゃならん」とも加えている。

事実、木村は大学史関係としては『明治大学百年史』第三巻・通史編Ⅰにおいて学生騒動がからんだ学内抗争の「植原・笹川問題」（章題同様）という一大事件を執筆した⁽⁶¹⁾。さらに同書第四巻・通史編Ⅱでは大学紛争時の改革を担当した⁽⁶³⁾。また、『明治大学 人とその思想』⁽⁶⁴⁾では大審院判事・法学部教授尾佐竹猛が出身の明治大学に博士論文を提出した際、大学は受理しなかつた出来事（東京帝国大学受理）⁽⁶⁵⁾について、「その仕事は学界から高く評価された。拒否によって損をしたのは明治大学ということになる」と綴った。

つまり、顕彰とは人物だけではなく学校、さらにここではすでに紹介するスペースは無くなつたが地域（とくに自治体史編纂）等々の場合でも起りうる問題であり、木村は用意周到ながらも、強い信念・信条で事に当たっていたことを認めざるを得ない。

なお、筆者は木村のあとを受けて、人物史描写について目下のところ、次のような留意点・課題項目を掲げている⁽⁶⁶⁾。

- 資料の調査収集と選定
- 成育環境の重視
- 教育の追求
- 時代性の分析
- 比較研究

5 近代および近代化との関係

木村は近世農村史、とりわけ社会構成史の研究から出発した。その後の葛藤や克服への様相はすでに述べた。それによって構築したのは「日本村落史」論であり、ここでは時代区分や時代研究上の専門性の弊害からの脱却はひとつ

の大きな特長であった。そして景観研究や千代川村史編纂の際には盛んに考古学・古代史の研究に興味を示した。近代史の分野について、最も力を注いだのは、大原幽学没後の門人たちによる動向である。とくに、すでに取り上げたところの対立・分裂の事件は大きく扱っている。さらに明治政府による二代目教主遠藤良左衛門に対する反政府活動への嫌疑・捕縛（無実。政府の誤解と権力行使）についても新資料を用いて叙述している。しかし、これだけで大原幽学没後の明治期や近代を描いたとは到底思えない。容易に考えられるところの具体的な問題点は、以下の通りである。

1 確かに幽学の教えは次世代の人々を担う江戸時代の人々（例…福澤諭吉・中江兆民ら）は異なる思考を存していた。しかし幽学は同世代、例えば儒学者の安井息軒・安積良斎らの考え方とはどのように違うのか。また二宮尊徳といった同世代で同様の農村指導者とは何が同じで、どこが異なるのか、比較を徹底的になさねばならない。

2 まして幽学の生前、そして没後にあっても、その教え（八石性理学）に対して批判的な村人も少なくなかった。あるいは一定の距離を置いて交流をしたり、さらには離脱する者もいた。そのようなことを強く意識した研究も必要であろう。

3 上記のことも関わるが近代の大きな特色であり、行論上欠くことのできない「中央」との関係も気に懸る。やはり近代は中央との相関関係が非常に強いからである。そのことは文明開化政策のみならず、宗教・学問等々、さまざまな分野からの考察が求められる。村落について、連続性を強調し、トータルに把握するならば、やはり近代との関係を強く意識し、近世中心論を前進させなければならない。

4 大原幽学に対する顕彰も再検討を要する。顕彰を強く否定する木村の考え方は前項で扱った。ついでに人物

描写上の偏見回避に関する筆者なりの留意点等も簡単に記した。しかしいずれにしても、大原幽学に対する顕彰活動は今日まで続けられている。木村もその点を念頭に置いていたことは、大原幽学研究史の考察により知り得る。⁽⁶⁶⁾ 研究書の分析を中心としたその研究をさらに進展させ、教育・教化運動、記念祭等々の資料の検討により顕彰する側から研究を具体的・詳細にすべきである。

もつとも共同研究「大原幽学とその周辺」終了後、木村は、今後、さらなる門人調査の必要を説いた。木村礎著作集『大原幽学と門人たち』⁽⁶⁷⁾所収の自らの「解説」でも門人およびその資料は「まだまだ発掘の余地は大いにある」としている。

実際、「干潟残党」(前出)は、当時の干潟町(のち旭市)依頼により大原幽学関係目録刊行に当った。さらに同町立大原幽学記念館の設立や資料調査・研究紀要執筆・国重要文化財指定等にも関与した。この間、残念ながら木村は逝去してしまつたが、「残党の残党」は遺志を受け継ぎ、二〇一〇年三月には門人調査の資料目録を刊行するとともに新出資料(近年、大原幽学旧宅内より発見されたもの)の検討にも当ることにより、目下、第二次国重要文化財指定をめざしている。

6 村落における「精神生活」・文化状況の解明

木村の文化史論、つまり「精神生活」論の定義とその実証については、すでに述べた。それは大原幽学研究をさらに発展させたものである。

しかし、この「精神生活」論は、通常の文化史研究とは異なる。それは従来の、通常の文化史研究では、村社会の

文化や知的状況、さらに生活は解明できないという意識に基づくのである。従来の研究成果を否定するわけではなく、それだけでは不十分としたのである。多くの歴史研究者はテーマを定め、研究史を検討してから資料調査に向く。そして見出し出した自己のテーマの資料をもとに論文を書く。木村は大きなテーマを定めると、対象とした地域の景観や資料を徹底して調査する。こうして地域全体を把握したのち、ポイントとなるテーマを絞り込んでいく。最初から仏像・絵画・和歌集といった調子ではないのである。そしてそればかりを検討するわけではない。だから多くの時間を費やすわけである。一口でいえば村落史としての文化史研究である。このようにして木村は、今後の課題が多いとしつつも、精神生活論について、一応『村のこころ』として刊行した。その内容もすでに紹介した。

ただし、厄介なことがひとつある。「こころ（心）」、「精神」、そして「文化」という用語の取り扱いである。「精神」とは思考や知識といった知的部分に関わる。そして人間の理性や知識から感情や意志にわたっているのが「心」である。とくに「心」はすべての精神的な活動を表わしている。したがって「精神」より「心」の方が広い概念である。このことを分けて考えているのか、どうか。それは単なる用語の意味だけの問題ではない。「心」と「精神」の定義をより一層明確にしないと結局は何でも全てが「心」であり、「精神」となってしまう。したがって木村が「遊ぶ」、「食べる」ことも「心」・「精神」に入れているのはこうしたことに基因している。

木村があまり使用していない「文化」とは、一般に人知・世態・生活などの内容や水準が昇華したものであるという定義である。具体的に狭義でキー・ワードを羅列すると、「知的」・「高度」・「抽象」・「専門的」・「有識」・「上層」・「学問」、あるいは「A級」などである。広義では「通俗的」・「大衆的」・「日常的」・「具体」・「庶民」・「広域分野」あるいはC級などである。また、この狭義と広義の中間に位置づけられる文化も、例えばセミプロ（ノンプロ）のような存在もあろうが、そのことは省略する。とすると、木村の「こころ」とか「精神生活」は、上記の文化形態の内、広

義の文化を主とするものである。つまり木村は従来の文化史研究の内、狭義の文化ではさほど扱われなかった広義のそれを強調したかったということになるう。

以上のことを筆者なりに整理してみる。ひとつの大きな球体にたとえれば、心の中に精神、その中に文化があり、文化の上半分は狭義のもの、下半分は広義のものであり、広義のものの方が大きい、ということになる。木村はその広義の文化を含めるといふか、強調して「精神生活」と称したのである。しかし、無理に「食べる」こと等まで「精神生活」に入れなくとも、他の項目の中で扱えるものもあるのではないのか。

とはいえ、木村にとっては村の文化について、対象としてアカデミック・ハイセンスなものだけではなく、また焦点（目線）の当て方としては「立って眺める」より「しゃがんで眺める」ことに努めたということも出来よう。それは豊富な村歩きによる実績に基づくものであるが、と同時にあの「下町のあんちゃん」以来の成育環境にもよるものと思われる。

確かに村人の「心」や「精神生活」、あるいは「文化」を研究する際、木村が対象とした通俗的・日常生活的文化の発掘と考察は必要不可欠である。しかし、そこから何を、どのように進めるのかということが重要である。もし木村の「精神文化」論の方向性を認めた場合に考えられる、今後の調査研究上の視点や事柄のいくつかを仮に列記してみる。

(1) 範囲・区別

「心」・「精神」・「文化」について

広義・中間・狭義の「文化」について

(2) 行動様式

習う・学ぶ

伝える・教える

拓く・創る

(3) 受容形態

上から

横から

下から

(4) 場⁽⁸⁸⁾

学校・公民館

寺社・行屋等

個人宅

(5) 交流形態

当該地域内

周辺（中央も含む）から当該地域へ

当該地域から地域外（とくに中央）へ

こうしたことを個別検討し、さらには複合的・総合的に考察していく必要がある。例えば、あくまでも仮説であるが、官製の文化（狭義）の場合、「伝える」・「教える」ことが、「上から」により、「学校」に入ってくることによ
り、「周辺から当該地域へ」浸透してくるのは近代云々といった調子である。

そして、さらに重要なことは村人の「精神生活」もしくは文化について、時系列と空間をどのように組み合わせ、統合させるかということである。木村自身も、歴史の描写方法として、「年表と事典」という意識を筆者に語ったことがある。さらには景観・生活・精神生活もしくは文化の関係をいかに有機的に解明していくべきかということである。⁽⁹⁾

本稿では、木村史学というべき木村礎の歴史学の中から文化史研究を論じた。最初は木村の成育環境をかいまみた。「下町のあんちゃん」を自認する木村の周辺はハイカルチャーやブルジョアといった環境条件はほとんど存在しなかった。このことは、後の精神史生活論、つまり文化史研究を規定した。長じて歴史研究者の道を歩み、社会構成史研究に没頭した。しかしそのことに疑問をもち、決別した。そして共同体などの基礎理論を徹底的に研究したり、一層村歩きをすることにより「日本村落史」論を唱え、さらに村落史の主軸を景観と生活とした。そしてその生活の中に「精神生活」を強調したのであるが、その起点は自身の共同体の再検討と、そして何よりも大原幽学研究にあつた。とりわけ「精神生活」論についてまとめたのが『村のこころ』であるが、これが実質上、最後の作品となつた。率直にいつて、そこに示された「精神生活」論は未完であり、課題が多い（木村もことわっている）。しかし、木村史学は日本文化史研究に、一石、というよりも巨石を投じたといえよう。

木村没後、地域社会論として農村・都市研究は進展している。そのことも念頭に「精神生活論」を検討したり、新たな方法論を創出するのは私達の責務である。

(注)

- (1) 例えば教育史研究においては、結局は「ベストアロッチとその教育愛」で終つてしまうと揶揄することばも聞かれた。
 (2) 一九八四年一月二日。日本経済評論社制作

- (3) 一九九四年四月二日。日本経済評論社
- (4) 二〇〇〇年一月一〇日。日本経済評論社
- (5) 成績証明書。前掲『戦前・戦後を歩く』
- (6) 前同書によれば、「島木健作『生活の探究』に熟中したのもこのころであるという。
- (7) 明治大学を選んだのは、自宅と勤務先の真中にあること。地理歴史科としたのは、文芸家では父を説得できないし、また同科は夜間部のみ解説されていた。さらに学校で習った科目では地理や歴史が好きだったからである。なお、大学進学めざしたのは、大卒としての教員免許状がほしかったためである。以上のことは『戦前・戦後を歩く』に述べられているが、筆者自身も直接、聞いたことがある。
- (8) 文雅堂書店、一九五八年七月
- (9) 八木書店、一九九四年一月
- (10) 前同書
- (11) 「戦後史料保存事始」『会報』第二七号、埼玉県地域史料保存活用連絡協議会、二〇〇一年三月、二〇〇〇年五月講演
- (12) 前掲『村落生活の史的研究』
- (13) 前同書
- (14) 前同書
- (15) 『駿台史学』第五〇号、一九八〇年七月
- (16) 木村は後年ではあるが「学問・研究の曲がり角」（明治大学『専教連会報』一三二、一九八八年九月）において「この学風（社会構成史的学風——筆者注）が、社会構成を論じていても、人間や思想を論じるには向いていないのではないかという疑問ないし自覚、また概念ばかりが先行して歴史の豊富さを捉えていないという指摘」があったとしている。
- (17) 前掲『耕地と集落の歴史——香取社領村落の中世と近世——』文雅堂銀行研究社
- (18) 前掲『戦前・戦後を歩く』、日本経済評論社
- (19) 前同書
- (20) 岩波書店、一九六七年一〇月
- (21) 前掲『村落生活の史的研究』
- (22) 前同書

- (23) 前掲『戦前・戦後を歩く』
- (24) 前掲『村落生活の史的研究』。もつとも同書は後年に書かれたものであるので、この段階で、ここまで批判の論点が明確であったか、否かは分らない。しかし、大方のところはこの通りであろう。
- (25) 『明治社会文化研究会会報』2、一九六六年六月
- (26) 『明治大学人文科学研究所紀要』10、一九七二年三月
- (27) 『思想の冒険』思想の冒険グループ、筑摩書房、一九七四年八月
- (28) のちに『村の遊び日——休日と著者組の社会史——』（平凡社、一九八六年九月）として刊行した。
- (29) 一九八八年一月に近世学問史研究にて「学問の普及と近世社会の性格」と題して発表したものをものに『江戸時代とはなにか 日本史上の近世と近代』（岩波書店、一九九二年二月）として刊行した。
- (30) 拙稿「大原幽学・その人と思想」『大原幽学「旧宅」半解体修理事業報告書』旭市教育委員会、二〇一一年四月八木書店、一九八一年一〇月
- (31) 吉川弘文館
- (32) 「書評 中井信彦『大原幽学』」『東京新聞』（夕刊）、一九六三年五月一日付
- (33) 東洋経済新報社
- (34) 前掲『戦前・戦後を歩く』
- (35) 前掲『戦前・戦後を歩く』
- (36) 前掲『戦前・戦後を歩く』
- (37) 前掲『大原幽学とその周辺』
- (38) 前掲『戦前・戦後を歩く』
- (39) 前掲『戦前・戦後を歩く』
- (40) 前掲『大原幽学とその周辺』
- (41) 前掲『戦前・戦後を歩く』
- (42) 前掲『木村礎年譜』、のちに『戦前・戦後を歩く』にも転載
- (43) 「幽学研究雑感」『千葉史学』第一二号、一九八八年五月
- (44) 明治大学近世近代史研究会、一九八七（昭和六二）年九月
- (45) 文一総合出版、一九七八（昭和五三）年

- (46) 教育出版センター、一九八〇年七月
- (47) 教育社
- (48) 『村の世界 視座と方法』（木村礎著作集VI、名著出版、一九九六年五月）木村は同書では色川氏の批判について、「近・現代における共同体の問題をどう考えるか、今の私には具体的な思案がない」としている。
- (49) 同書では、西垣晴次からは機能論（民俗学、社会学により重視）の欠如の指摘があったことも記している。
- (50) 前掲『村落生活の史的研究』
- (51) 『駒澤大学史学論集』一五、一九八五年三月
- (52) 以上、『村の生活史』、雄山閣出版、二〇〇〇年六月
- (53) 『村のこころ』、雄山閣出版、二〇〇一年九月
- (54) 前掲『村落生活の史的研究』
- (55) 千代川村、一九九七年三月
- (56) 前掲『会報』第二七号
- (57) 「ある感銘」『大法輪』、大法輪閣、一九七二年三月
- (58) 以上、木村礎「編纂経過の概要」『明治大学百年史』第一卷、史料編I、明治大学、一九八六年三月
- (59) 拙稿「大学史活動の基本—大学史資料の調査研究にあたって—」『大学史活動』第二十五集、二〇〇四年三月
- (60) 二〇〇三年一〇月
- (61) 章題は「植原・笹川問題」
- (62) 明治大学、一九九二年一〇月
- (63) 章節は「大学改革をめぐる学内の激動」
- (64) 「尾佐竹猛論」、明治大学新聞学会、一九六七年一月
- (65) 拙著『大学史および大学史活動の研究』、日本経済評論社、二〇一〇年一〇月
- (66) 前掲『大原幽学とその周辺』の「研究史の概要」
- (67) 名著出版、一九九六年一一月
- (68) 木村は、『村の生活史—史料が語るふつうの人びと』（雄山閣出版、二〇〇〇年一二月）において村民生活の日常性を明らかにするために、地域の構造を三層に分けた。図式化すると、次のようになる。

村Ⅱ村民生活の枠組、行政的・公法的

小名・坪Ⅱ村民生活の日常

郷Ⅱ交通による流通・情報上の広がり

(69) 拙稿「村落生活と景観」・「ある農家の三代」・「村人の日常世界」・「村落生活と文化」(前掲『村落生活の史的研究』) 参

照